


 ずいそう

Bauma China 2004 視察記

佐藤 由之



とにかく人、人、人である。どこを向いても人だらけである。Bauma China 2004 は機械も数多く展示されていたが、人間はもっと多かった。

世界的規模の建設機械展示会である Bauma は、2002 年に中国上海をその開催地として選んだ。初回に続いて今年開催された Bauma China 2004 を視察するチャンスを幸運にも頂いて、11 月 15 日から 4 日間、上海を訪れてきた。

今回の Bauma China 2004 は、最近完成した郊外の上海新国際博覧中心（日本流に言えば上海新国際展示場）での開催となったが、2002 年の前回と比較すると展示面積で 2 倍以上の広さとのこと。因みに出展社数は 27 ヶ国から約 700 社（殆どが中国のメーカー）で 1.6 倍増、来場者は 100 ヶ国から約 5 万人が訪れてこれは 1.5 倍増だそうだ。この数字だけでも大盛況だったことがお分かりかと思う。いずれにしても、これから国土の大開発が更に進むことが明白である中国の地で建設機械の展示会を開催したことは大成功だったであろう。

さて、Bauma China 2004 であるが、先ずは会場入り口から圧倒された。繰り返すが、とにかく人、人、人…。団体で訪れた我々は入場パスを事前申し込み済みだったが、それでも入場までに 30 分以上を費やしてしまった。中へ入ると、当然ではあるが先ずはキャタピラー社ブースへ一直線。見覚えのあるロゴマークを目指して人ごみを掻き分けて進んだ。見慣れたキャタピラーイエローの油圧ショベル、ホイールローダ、ブルドーザ達ではあるが、異国の地で見るとまた違う味わいがある。展示は油圧ショベルが中心だったが、ローラー等道路工事用機械も展示されていたのは道路建設が急ピッチで行われている中国ならではのであろう。同業他社のブースもしっかりチェックしたが、やはり油圧ショベルを重点的にアピールしているようだ。

キャタピラーブースでは、他社ブースでも同様だが、大勢の人がロゴマーク入りのバッグやカタログをもらう為に長蛇の列を作っていた。現地ガイドや現地法人の方にこっそり聞くと、実は建設機械に係わらない中国人も多数来場していたそうだ。彼らは最近多く開催されるこのような展示会に来ては、カタログやノベル

ティグズを集めるのが好きらしい。

展示会では大型機械は屋外で展示されており、小型機械や油圧機器等は屋内展示だった。屋内展示場には、その他にも操作レバー、コネクタ、IC 部品、電気コードが並び、さながら秋葉原の裏通りのようだった。また場内は、日・米・欧の大手メーカーを除くとほとんどが中国のメーカーなのだが、アレっと思う機械も見つかった。その訳は…、似ているのである。形が、デザインが、とても似ているのである。勿論、性能は大きく違うはずだが、キャタピラーを含めた大手メーカーの機械に似ているそっくりな製品が堂々と並んでいた。さすが中国というか、いろいろな意味でスケールの大きい国なのだろう。

ここで Bauma China 2004 以外の上海についても少し記したい。4 日間滞在してみて驚いたのは、お金は何処でも、何を買うのでも日本円が通用したことだ。更に言えば、ものを買ったり、飲んだり、食べたり、いわゆる観光的スポットでは日本語が大体通じるのである。彼らは、英語は話せないようだが日本語は結構話せる。考えてみれば、これも日本人が数多く中国を訪問していることの表れか。交通事情に関しては、経済発展に伴い急増する乗用車に対して道路施設が追いつかない為、激しい渋滞が多かった。最も混んでいる時の東京の首都高速と同じかそれ以上の渋滞であり、市内では朝夕の移動は時間が読めない状況だ。もっとも信号が少ないのと、車も人も自転車も信号や交通ルールをあまり守らないことも渋滞の大きな要因だった。高速道路も拡張中で、上下 4 車線のある路線は 8 車線へと広げる工事を行っていた。いきなり倍増させるのも、これまた中国らしい。

僅か 4 日間の滞在だったけれど、このスペースでは表現しきれないほどたくさんの要素を持った街だと感じた。近代的な超高層ビルが立ち並ぶそのすぐ横の路地では、まだ昔と変わらぬお店があったりする。その中でこれから発展していく街のエネルギーだけは確かなものであった。短期間で大きく変わるであろうこの街は、近いうちに再び訪れたいと思わせる場所だった。

—さとう よしゆき 新キャタピラー三菱株式会社直販部—